目白大学　心理学研究
第20号　2024年　41－53

資料

心理学のパブリックイメージに関する研究動向および今後の展望

目白大学大学院心理学研究科　内間　望
関西国際大学心理学部　沼田　真美
目白大学社会学部　藤巻　貴之
目白大学社会学部　今野　裕之

【要　約】

本論文の目的は，心理学のパブリックイメージの研究動向を概観し，心理学の普及・啓発の今後の方向性を提案することである。1892年にアメリカ心理学会が設立されて以来，社会における心理学リテラシーを高めることの重要性が指摘され続けてきた。日本においても学問としての心理学にとっての大きな課題は心理学の普及・啓発であり，「心理学のパブリックイメージ」に関する研究も多数行われている。高校生・大学生・社会人を対象としたそれらの研究からは，彼らが必ずしも心理学という学問に対して正しいイメージを抱いているとは限らないことが分かる。これらの知見から，本研究では普及の方向性として，第１に高校生に普及させ，大学で心理学を専攻する学生を増やすこと，第２に社会人のリカレント教育として心理学を普及させることを述べた。最後に，心理学が大学卒業後世代である社会人のリカレント教のための教育内容として有益であるという実証研究が必要であること，その実証研究の結果を踏まえたうえで社会人に対する心理学教育を構築する必要性があることについて考察した。

キーワード：心理学イメージ，リカレント教育，心理学教育

心理学はこころについての科学的研究を目指し，人間の心・精神，考え，感じ方，行動する力とそのメカニズムを解明する学問であると鹿取他（2015），無藤他（2004）は定義している。したがって，心理学の普及のためには，心理学が一般の人々から如何なる学問だと理解されているかを把握する必要がある。本研究では，心理学のパブリックイメージの研究動向を概観し，心理学の普及・啓発の今後の方向性を提案する。

心理学の普及の重要性

1969年，Miller, G.Aは当時会長を務めていたアメリカ心理学会における講演で，心理学は一般大衆に影響を及ぼすことを通して真の影響を発揮すること，そのためには心理学が大衆に与える影響を分析する必要があることについて述べている（Miller，1969）。また，Banyard & Hulme（2015）は，世間一般の人々の心理学的スキルと知識を用いて現実世界の問題を解決し，日常生活を向上させるための能力である心理学リテラシーを高めることが心理学者にとって重要な目標となると主張している。あらゆる学問にとって，その普及啓発は重要な目標と言えるが，とりわけ心理学にとっては，普及啓発が重要な目標となると考えられる。

しかしながら，心理学についての世間一般の認識，すなわち心理学のパブリックイメージは心理学の実際の姿と乖離していると考えられる。実際，科学的心理学とパブリックイメージの差は，1879年にドイツで世界初の心理実験室が設立された約30年後には既に問題視されて

いた（Benjamin，1986）。つまり，心理学が学問として確立された一方で，その科学的根拠や学問的研究手法などの理解は学界の内に留まっていたといえる。Benjamin（1986）はその理由として，第一次世界大戦後の心理学に関する書籍，新聞報道は一般的ではなく，また，資格のない人々が心理学の専門家を装ったり，心理学の自己啓発本が数多く出版されるなどしたが，心理学者や精神科医が執筆したものはほとんどなかった点を挙げている。この当時，心理学は戦争での活動，特に軍人の選抜に関する活動で耳目を集めていたが，その結果，学問的ではない娯楽性の高い「ポップな」心理学ばかりが注目され，多くの似非心理学者の詐欺的行為を許すこととなってしまった（Benjamin，1986）。Adams（1934）はこの一時的な心理学ブームについて，心理学がその科学性を捨てて心理学者が人気を手に入れる行為だと断罪している。Adams（1934）による心理学への批判は1934年のニューヨーク・タイムズの社説にも反映され，心理学は大恐慌の問題に対する解決策を公表していない唯一の学問・職業であると批判された（Benjamin，1986）。日本でも，たとえば血液型性格占いや心理ゲームといった通俗的な心理学が注目されることにより，学問としての心理学とパブリックイメージとの間に乖離が生じているという指摘がある（東他，1994）。以上のことより学問としての心理学を正しく一般の人々に理解してもらえるようにいていくことが非常に重要であるといえる。

心理学のパブリックイメージを把握する意義

既に述べたように，1892年にアメリカ心理学会が設立されて以来，心理学者は自分たちのパブリックイメージを意識してきたが，心理学に関する一般市民の意見や理解に関する調査は1940年代まで実施されなかった（Wood et al.，1986）。このパブリックイメージの実態を把握・検討することを先延ばしにしたことについて，Lilienfeld（2012）は心理学に対する世間一般の懐疑的な見方が広範かつ長年にわたって続いていたにも関わらず，その理由を検証することに対して心理学者が消極的だったからであると批判している。

このように，社会における心理学リテラシー（Banyard & Hulme，2015）を高めることの重要性が指摘されている一方で，長い間，心理学の社会的理解・受容については研究されてこなかった。しかし，心理学を正しく理解させる継続的営為がなければ，心理学に対する無理解，あるいは心理学に対する否定的認知が広がる可能性もある。実際に，Lilienfeld（2012）は心理学に対する批判を，1）心理学は単なる常識である，2）心理学は科学的手法を用いない，3）心理学では意味のある一般化はできない，4）心理学は再現性のある結果をもたらさない，5）心理学では正確な予測はできない，6）心理学は社会の役に立たない，の6点を挙げ，心理学に対する懐疑的な見方が広範かつ長期にわたって存在すると指摘している。そして，心理学のパブリックイメージをより現実に即したものに修正する活動も行われているものの（e.g. Hartman et al.，2016），その影響は限定的なものと考えられる。

本研究の目的

本論文の目的は，心理学のパブリックイメージの研究動向を概観し，心理学の普及・啓発の今後の方向性を提案することである。より効果的な普及啓発活動を展開するためには，活動の効果を検証したうえで，手法等の改善をすることが望ましいと考えられるが，世間一般の認識であるパブリックイメージに対する効果を検証することは，現実には難しい。したがって，現実的な方策として，世間一般の人々が心理学に対して抱くイメージ（心理学のパブリックイメージ）を測定し，修正する必要があるほどの偏り・誤りがあるかを検討することになるだろう。たとえば楠見（2018）は，社会のニーズに沿った心理学研究・心理学教育を行うにはどうすべきかを検討するために，日本心理学会の企画の1つとして，高校生，大学生，小・中・高の教員，社会人，心理学者や他分野の研究者を対象に心理学へのイメージや期待を調査している。その結果，1）一般市民はテレビや本から得た情報を心理学の知識として蓄えていること，2）小・中・高の教員は一般市民よりもアカデミックな心理学の知識を持しているが，教

育に役立っているという認識は低いことなどが明らかになった。このように，心理学の普及啓発を進めるうえで，心理学のパブリックイメージを研究することは，心理学が社会に必要とされる学問であり続ける点において一定の意義があると考えられる。本研究では，心理学の正しい普及啓発の基礎となる「心理学のパブリックイメージ」に関する研究結果を概観したうえで，今後の心理学の普及啓発の方向性について論じる。

なお，これまでに行われてきた心理学のパブリックイメージに関する研究を概観する際，発達段階順に「高校生以下（心理学を学ぶ以前の年代）」「大学生（心理学を学ぶ年代）」「社会人」に区分し，この区分に沿って先行研究を整理していく。加えて，心理学のパブリックイメージ研究では心理学に対するイメージ（以下，心理学イメージ）あるいは心理学への期待観（心理学を学ぶことでできるようになると思うこと，心理学ができると思うこと）のどちらか一方を構成概念として用いる研究が多く見られるが，本論ではその２つを合わせて「心理学のパブリックイメージ」とする。

心理学のパブリックイメージ研究の概要

高校生が抱く心理学イメージ

学生対象の心理学イメージ研究自体は1960年代頃から行われていた（e.g.稲垣他，1968；東他，1994）。ここでは先ず高校生（心理学を学ぶ以前の年代）の心理学イメージを整理していく。高校生対象の研究全体の特徴として，「より良い進路選択を促す」という目的意識で行われる研究が多くなっている。

心理学へのイメージ・ギャップが大きい場合の進路選択について，神庭他（2020），林他（2019）はそれぞれの立場を示している。神庭他（2020）は，たとえ高校生の心理学への関心が実態とマッチしていたとしても，誤ったイメージを抱いている場合には心理学への関心を示さないまま進路選択をしてしまう可能性があると訴えているが，林他（2019）はイメージ・ギャップによって意欲が減退するとは一概にはいえず，更なる興味につながるのか，あるいは興味の消失につながるのかは検討すべき内容であると述べている。では，実際に高校生の心理学イメージはどのようなものなのか。

高校生の心理学イメージを検討した代表的な研究として，小浜・高田（2017），工藤他（2004），林他（2019）がある。小浜・高田（2017）は，高校生は心理学にカウンセリング，うつ病といった臨床心理学のイメージのほかに，占い，性格診断，心を操る・読む，メンタリズムなどの非科学的なイメージをもっていることを明らかにした。これは神庭他（2020）の結果とも一致する。また，小浜・高田（2017）は大学生を対象とした工藤他（2004）と同様，社会的貢献についての回答もみられた。一方で，高校生は心理学について明確なイメージをもっていないと結論づける研究もある（e.g.林他，2019）。また，林他（2019）の調査結果では，高校生の心理学への興味が高い群において，心理学への期待観が大学生の数値を上回っていた。以上より，高校生は大学生と同様に心理学が社会的問題の解決に肯定的な効果をもたらすというイメージをもっており，その程度は大学生よりも強い可能性が示されている。

高校生の心理学イメージについて，近しいほかの学問領域との区別を検討した主要な研究には神庭他（2020），木島他（2013）がある。神庭他（2020）は，高校生における心理学と社会福祉学のイメージの相違点として，心理学へは「カウンセリングができるようになる」「人の心を理解し，アドバイスをすることができる」といった専門的知識の活用方法に関するイメージがあることを示した。一方，社会福祉学へは「調査データなどに基づいて考えることができる」という客観的データに基づいた論理的思考のイメージがあることを示した。このように高校生において，心理学と近しい他学問領域との境界線が曖昧であるという神庭他（2020）の結果は木島他（2013）においても指摘されている。

あわせて，高校生がもつ心理学の知識に関する研究も見てみると，心理学の学習経験はないが「心理学に対する知識がある」と自己認識している高校生ほど心理学への好感度は低いことが明らかになっている（e.g.沼田他，2023a；沼田他，2023b）。この結果は，日常生活で触れる心／心理学に関するメディアや娯楽などからの

情報が学問としての心理学のイメージに直結している可能性が考えられ，この点については丹治他（2005），丹治他（2006）でも述べられている。

大学生が抱く心理学イメージ

心理学のパブリックイメージ研究は調査の実施可能性の高さ，大学での心理学教育に直接活かせるという利点の高さから学生を対象としたものが多く，その大部分が大学生対象の研究である。

心理学を専攻する新入生の心理学イメージを検討した代表的な研究には工藤他（2004），丹波他（2003）がある。工藤他（2004）では，学生の心理学への期待観を把握するため，心理学の学習に対してどのような見通しをもっているかを多肢選択式で調査した。その結果，ほとんどの学生は心理学の学習に何らかの期待をもち，特に非行・犯罪，学校教育問題といった社会問題への対応が可能になるといった期待を抱いていることが示された。その一方で，社会問題の根本的な解決は心理学にはできないと思うという回答も見られた。丹治他（2003）は，常識心理学クイズと題し，心理学の基礎的な知識を問う内容の正誤問題を解かせたところ，平均正答数は半数程度に留まり，「心理学を学ぶと他人の心が容易に分かるようになる」などの問題でも５％以上の人が誤答していた。

非心理学専攻の学生の心理学イメージを扱った主な研究としては石井・村松（2000），佐藤（2017）がある。石井・村松（2000）は看護学生を対象に，心理学のどのような知識を有していることが将来の仕事に役立つと思うかを調査した。その結果,「成果が得られないと人は怠けるようになる」,「人はレム睡眠中に夢を見る」などの動機づけ，意識，生理，臨床などの領域に有用性が見出された。また，佐藤（2017）は理工学部，経済学部の学生を対象に心理学への期待観を尋ねたところ，大学生は心理学を「人の感情や考えが読める」「マインドコントロールで人を操れる」といった読心術のようなものだとイメージしていることが明らかになった。

大学１年生の一般教養科目としての心理学の授業実施前後で心理学イメージを比較・検討した主な研究には宮本（1994），松井（2000）がある。宮本（1994）は授業評価と心理学イメージの関連を受講前後で比較・検討したところ，その結果に変わりは見られなかった。一方，松井（2000）では「不思議・神秘的」「つかみどころがない」といった心理学イメージから「科学的」「脳との関係が深い」といった心理学イメージへの変化が見られた。松井（2000）に関連した研究では岩崎他（2012）がある。岩崎他（2012）は大学１年生から４年生を対象に新年度開始時の心理学イメージを調査している。その結果，松井（2000）と一致する結果に加え，心理学専攻の大学生は心理学を学ぶことで「カウンセリング」や「人間理解」「コミュニケーションスキルが上達する」と期待されていることが明らかになった。ただし，この傾向は１年生に顕著なものであり，学年が上がると低下していた。以上３つの研究結果をまとめると，大学における心理学教育を通して，心理学を正しく伝えることは概ね成功しているといえよう。

心理学専攻の学生と非心理学専攻の学生が抱く心理学イメージを比較・検討した主な研究として，谷口・金綱（2013），丹治他（2005），丹治他（2006）がある。谷口・金綱（2013）は心理学専攻の学生の心理学への期待観を検討するため，専攻に何を期待しているのかを調査した結果，専攻する学問の知識を専門的に学び，日常生活や悩みに活かしたいと考えていた。一方，非心理学専攻の学生においては，専攻する学問での学びを通して一般教養を含む一般的知識について獲得したいと期待していることが示された。また，丹治他（2005）および丹治他（2006）は心理学専攻と非心理学専攻の新入生を対象に，心理学知識に差があるかどうかを検討したところ，専攻間に大きな差はなく，世間の誤った心理学知識の影響を共に強く受けている可能性が示された。

丹治他（2005）および丹治他（2006）において示されたような世間の誤った心理学の知識やイメージはどこから来ているのだろうか。心理学イメージとマス・メディアとの関連を検討した主な研究として，和田（2004），泊（2015），高島・中村（2002）がある。和田（2004）は心理学イメージとマス・メディアと

の関連を調べ，大学生１年生が心理学を知ったのは，メディアで取り上げられた心理テストや本，雑誌を通じてからであることを明らかにしている。さらに，大学での心理学の授業を受講する前の事前調査では，メディア接触の頻度が高い人ほど心理学への興味が高く，超常現象などの迷信に対する信念も高かった。一方で，受講後はマス・メディアからの情報量が減少している傾向が見られた。心理学に超常現象の原因解明を期待している学生が接触しているメディアのより具体的な内容としては，メンタリストDaigoの登場番組，民法番組の「ホンマでっか！TV」，心理学者・カウンセラーが登場する映画やドラマが挙げられる（泊，2015）。これらのマス・メディアを通じた学問としての心理学のイメージは，メディアで取り上げられることの多い心理テストへの関心が最も高くなっている（高島・中村，2002）。

以上を踏まえると，日本の大学生が初めて心理学の授業を受講する際には，既にあらゆるメディアを通じて，心理学に関連するイメージが流布されており，そのイメージは，非常に偏りのある誤った内容であると推察される。これらの偏った誤りのあるイメージを持った大学生に対して，和田（2004）は，メディアで取り上げられることの多いトピックには興味・関心をもつ一方，統計の学習といった未知の内容に対しては意欲を減退させ，心理学への興味を失う可能性について指摘している。

さて，これまで述べてきたように，日本の研究においては，誤った，あるいは偏りのある心理学イメージを抱いたまま大学に入学してくる学生が多い現状がある。これは学問としての心理学の普及不足の結果であるといえるだろう。加えて，小杉（2017），半澤（2009），前堂（2005）は心理学にある種の誤解や現実的ではない期待を抱いて入学してきた者が，学問としての心理学に触れた際にイメージ・ギャップを抱き，それによって大学入学後の学習意欲減退という新たな問題につながる可能性についても危惧し，その問題意識から心理学イメージ研究を行っている。さまざまな学問で同様の現象が起こる可能性はあるが，心理学専攻の学生が心理学を学ぶ際にも問題の１つとなるだろう。小杉（2017）は心理学イメージについて，心理学初学者は自身が抱く心理学イメージと実際の学問としての心理学の乖離を乗り越えていかなければならないと述べている。この学業における期待と現実のギャップによるショックを半澤（2009）は「学業に対するリアリティショック」という言葉で表現し，大学入学以前は心理学に対する経験や知識が乏しいため憧れを抱きやすいが，大学での学びを通して心理学から離脱していってしまう状況を懸念している。さらに，前堂（2005）は，イメージ・ギャップに落胆し，学習意欲を失った者は，心理学に学問的楽しさを見出す前に離脱するため，大学入学以前の熱意は取り戻しにくいことを指摘している。心理学の普及を目指すためにも，大学生が抱く心理学イメージや心理学への期待感（心理学へのニーズ）を把握し，大学教育に活かすことは必要不可欠である。

一方，海外では，大学の心理学教育におけるカリキュラム構成・授業構成の資料目的でパブリックイメージ研究を行う場合，質問紙法や面接法の他，大学で教科書として扱われている書籍を対象とする方法も盛んである（e.g. O'Donohue & Brendan，2018；Dixon et al.，1997）。日本同様，大学生の学習意欲減退を問題視している研究にはBrinthaupt et al.（2016）がある。加えてBrinthaupt et al.（2016）は大学卒業後，学生たちが就職した際に生じるであろう問題についても触れ，大学生の心理学への誤解は大学での心理学教育である程度修正することができるが，就職した際には心理学を専攻していた学生の心理学への認識と雇用主が評価する仕事のスキルにギャップが生じることも懸念している。この他にもイギリス（e.g. Van Hoye, G et al.，2014），イタリア（e.g. Pediconi, M. & Rossi, S.，1998）など７カ国以上の国で大学生が抱く心理学イメージ研究が行われている。

社会人が抱く心理学イメージ

社会人対象のパブリックイメージ研究は高校生・大学生対象の研究に比べ，非常に数が少ない。また，「社会人」対象の研究を紹介するうえで，日本と海外の差異があることも強調してお

きたい。日本における社会人を対象とした研究は，対象者を年代ごとに区別し，社会人を「大学卒業後の就業年齢」に限定して調査が行われている。一方，海外の研究では，社会人のみを対象にするのではなく，高校生から60-70代までの幅広い年齢を対象とした研究が多い（たとえば，Hartwig & Delin,（2003））。すなわち，調査対象者に社会人が含まれている状態である。したがって，海外の研究においては，幅広い年代の一部として社会人データが扱われることとなるため，日本の研究結果と異なり，社会人の心理学イメージのみを明確に抽出することは，難しい面があることを意識する必要がある。

まず，日本における社会人の心理学イメージを検討した主な研究には，大橋他（2012），大橋他（2013）があり，日本では心理学の有用観による検討が盛んである。大橋他（2012），大橋他（2013）は，心理学の学習経験がない社会人において，心理学は「脳科学と関わりが深い数学的な学問だが実践的でもある」と認識されていることを明らかにした。一方，心理学の学習経験がある社会人のうち，３分の１以上の者が「心理学の学習内容は役立っていない」と認識されていることも明らかにしている。この結果に対し，大橋他（2013）は，心理学に含まれる知識や技術が役立っていることについて，回答者がその状況に気付けていないと考察している。以上のように，心理学の専門的知識・スキルが役立たないと感じられる原因についてBanyard & Hulme（2015）は，心理学という学問はその特性上，人々の日常生活の一部と重なる側面が多く，心理学が心理学者だけのものではなくなっているからなのかもしれないと述べている。すなわち，心理学はその知見を活かしやすい身近な学問であるものの，それ故に効果を感じられにくい学問として捉えられてしまっているということであろう。

この他，社会人を対象とした研究として，吉本他（2017）では，高校生の親が心理学に対して高い関心をもっている場合に，我が子の進学先として心理系４年制大学を勧めたいと思う程度が高いことが示された。

次に，海外における社会人を含む心理学イメージについて検討した主な研究として，Thumin & Zebelman（1967），Ronen（1980），Fernández-Rodríguez,et al.,（2020）がある。なお，社会人の心理学イメージを把握しようという動きは日本よりも海外の方が早かった（e.g. Hidalgo et al.，1991）。Thumin & Zebelman（1967）は，この当時の人々が外科医，エンジニア，弁護士，精神科医，歯科医に次いで心理学者を望ましい，すなわち就きたい職業だと認識していたことを示している。他方，Ronen（1980）は，会社経営者たちが社員の人選，研究，態度調査に心理学は役立つと考えていたことを明らかにした。この結果は現代でも変わらず社会人の70％以上が心理学／者を必要とし，心理学を科学，社会のさまざまな分野に役立つと認識している（Fernández-Rodríguez, et al., 2020）。

以上より，社会人対象のパブリックイメージ研究において日本は仕事を含む日常生活で心理学がどう役立つかの視点から研究が行われ，海外はどの業務，職業において役立つかといった視点で研究が行われているといえる。

さて，これまで概観してきた日本国内における心理学のパブリックイメージ研究の概要をTable 1にまとめる。

日本における心理学のパブリックイメージは，科学的や読心術など，そのイメージが多種多様であることが分かる。各年代の心理学イメージが多岐にわたる理由についてBrinthaupt et al.（2016）は「心理学分野には幅広い下位分野が存在し，心理学への誤解に関する複数の研究結果が類似していることを考えると，学生が心理学分野，特定の仕事に必要な教育の種類とレベル，心理学で働く人々の特徴について不正確な見解をもっていることは驚くべきことではない」と述べている（Brinthaupt et al.，2016, pp.78）。また，社会人が抱く心理学イメージは高校生・大学生よりも心理学の学問的側面に関する内容が多くなっている。これは高校生・大学生よりも社会経験を積んでいる社会人の方が，より正しい心理学イメージをもっていると捉えることもできるが，社会人対象の研究は未だ少ないため，データ不足による偏りが見られているだけの可能性も否定できない。

Table 1
日本における心理学のパブリックイメージ

	大学生		高校生		社会人	
	正しい	誤り	正しい	誤り	正しい	誤り
学問イメージ	・科学的 ・客観的 ・理系 ・脳と関わりが深い	・神秘的 ・読心術 ・超常現象		・占い ・読心術 ・メンタリズム ・データは用いない	・数学的 ・脳科学と関りが深い	
臨床イメージ	・人間理解 ・カウンセリング ・コミュニケーションスキルの上達	・心を操る ・マインドコントロール	・人間理解 ・カウンセリング ・うつ病 ・性格診断（注1）	・心を操る ・カウンセリングは社会福祉学の分野		
有用性	・非行，犯罪 ・学校教育問題	・根本的な解決には至らない			・実践的	・役立たない

注1：高田・小浜(2017)では，この「性格診断」をアセスメントと解釈しているが，回答者である高校生がどう解釈したか定かではない。

今後の心理学の普及啓発の方向性について

日本における心理学の普及啓発の課題

先述したように，日本においても，学問としての心理学の大きな課題は普及啓発である。日本学術会議の心理学・教育学委員会心理学の展望分科会は2010年，「心理学分野の展望―人間社会の持続的発展にこたえる心の科学の構築―」と題した対外報告の中で，心理学に対する社会からの要請に応える方策の一環として，科学的な正しい知見に基づく心理学的な知識の普及啓発を目的に，初等・中等教育における心理学的なものの考え方の導入を検討すべきであると指摘している（日本学術会議，2010）。心理学のイメージや心理学を学ぶことで修得できると考えられる内容について高校生と心理学専攻の大学生との間にはギャップが生じているという調査結果をもとに，心理学の知識で「一般常識となっている部分」を増やす必要性を主張する研究もある（林他，2019）。

様々な学問分野が存在するが，英語・数学など初等・中等教育の段階で学習可能な学問がある一方で，心理学については初等・中等教育段階で学ぶ機会がほとんどない（内田・板倉，2016）。その一方で，文系学問においては他学問よりも人気のある学問であり（岩崎他，2012），加えて，大学での学習以前に何らかの形で既にイメージが形成されている可能性が高いという点で特異的な学問領域でもある（工藤他，2004）。小杉（2017）は，心理学を「名前の通った学問であり，名前の印象が与えるイメージと実際との乖離が最も大きい学問である」と述べている（小杉，2017，pp.200）。

このような普及啓発上の課題を背景として，日本でも日本心理学会を中心に，学問としての心理学を広めるための取り組みが行われている。日本心理学会は2012年度より「高校生のための心理学講座」を開催し，2023年度現在は12の大学で実地開催が予定されている。この講座は，心理学に興味関心がある中・高校生やその保護者，教職員を対象に「心理学は実証に基づく科学的な学問である」ということを伝え，心理学に関する誤解を解く目的のもと行われてきた（日本心理学会，2022）。日本心理学会が運営しているウェブサイト上で閲覧可能な心理学教材としては，心理学ミュージアム[1]，心理学を学べる大学一覧[2]，心理学Q＆A[3]，心理学の歴史[4]，YouTubeチャンネル[5]などがある。これらのコンテンツも心理学の学術的側面を親しみやすいように解説する普及啓発の取り組みの1つだ。このように日本心理学会は，心理学の普及が不十分であるという問題意識のもと中・高校生を対象とした普及啓発活動を活発に行っている。

他方，社会人対象の普及啓発は，心理学系の学部・学科がある大学で公開講座を開催したり，エクステンションセンターで心理学の講座を開設する活動が主となっていると考えられる。たとえば，早稲田大学エクステンションセンターでは「心理学入門」と題した講座が設けられている（早稲田大学，2023）。また，一般社会人向け普及啓発メディアとして，日本心理学会から年に4回刊行される『心理学ワール

ド』がある。『心理学ワールド』は，心理学を専門としている学生・研究者に加え，心理学に興味をもつ社会人を対象に，心理学の知識を広め，広く議論する目的でその時々で注目を集めている最新の心理学のトピックを掲載している（繁枡，2011）。

以上のように，日本においても心理学の普及啓発は課題として認識されており，実際の普及啓発の取り組みも行われているといえる。

社会人のリカレント教育

これまで大学生・高校生・社会人が抱く心理学イメージを整理してきたことで，どの年代においても誤った心理学イメージが一定程度定着していることが明らかになった。そして，この心理学に対する誤解を解く努力を心理学者はすべきであるという指摘も既に述べてきた通りである。先述したように，現在の心理学の大きな課題は「心理学という学問の普及」であるが，心理学教育に最適な場が大学であることを考えると，普及の方向性として大きく1）高校生に普及させ，大学で心理学を専攻する学生を増やす，2）社会人のリカレント教育として心理学を普及させる，の2方向が考えられる。そして，普及の際には心理学のパブリックイメージ研究の知見を活かし，起こりがちなイメージの誤りや偏りを修正できるような教育内容・方法の工夫が望まれるだろう。

上記のうち1）については，かねてより高校生への心理学教育の重要性が指摘されてきたこともあり（日本学術会議，2008），高校への心理学の授業の導入が取り組まれている。授業内容としては高校生が興味をもっている心理検査やコミュニケーション，カウンセリング，そして，心理学の科学的側面を伝えるためのデータ収集方法に関する授業を臨床心理士やスクールカウンセラーが実施することが考えられている（大辻他，2005；堀江，2018）。この取り組みは大学における心理学教育への橋渡しをスムーズにし，より効果的な教育のあり方を探索するという目的意識のもと行われている。

2）については，現在，社会人が就労後に教育を受けてキャリアアップやキャリアチェンジを果たす有益な方法としてリカレント教育が重視されており，厚生労働省（教育訓練給付金等），文部科学省（教育プログラム開発等）・経済産業省（創造性人材育成支援事業等）などでもさまざまな施策が実施されている。厚生労働省では「労働者の主体的な学びへの支援」と題して対象の講座を受講しながら資格・知識の習得ができるよう支援金制度が用意されており，心理学の大学院（修士課程）も12件対象となっている（厚生労働省，2000）。文部科学省が運営する社会人対象の講座まとめサイトでもビジネス系，文系，福祉・健康，理工・情報・IT系，看護・医学・栄養・家政・生活関連の5分野で心理統計を用いたデータサイエンスの同一講座がランキング3位以内に入っている（文部科学省，2019）。

一方，経済産業省が示す「人生100年時代の社会人基礎力（Figure 1；経済産業省経済産業政策局産業人材政策室，2000）」では，3つの能力：12の能力要素を挙げ，考え抜く力（課題発見力，計画力，創造力），チームで働く力（チームワーク：発信力，傾聴力，柔軟性，状況把握能力，規律性，ストレスコントロール力），前に踏み出す力（主体性，働きかけ力，実行力）に整理されている。これらの3つの能力：12の能力要素は，個人が企業・組織・社会と関わる中で，ライフステージの各段階で活躍するために必要な力と定義される。そして，自身の能力を発揮するためには，自己を認識してリフレクション（振り返り）しながら，目的，学び，統合のバランスを図ることが必要であると述べられている（経済産業省経済産業政策局産業人材政策室，2000）。これらのことからリカレント教育では，先に挙げたデータサイエンス等に関わる講座のみならず，心理学の知識が求められるチームで働く力の能力要素である傾聴力や柔軟性，ストレスコントロール力などを習得するプログラムが求められていると考えられる。

先に述べた社会人基礎力は，経産省により設置された「社会人基礎力に関する研究会」（諏訪康雄座長）により提唱されたもので，動機付け（前に踏み出す力），チームワークやカウンセリング（チームで働く力），創造性や批判的思考（考え抜く力）など，多くの心理学的要素を含んでいる。また，社会人基礎力と心理学の関連を

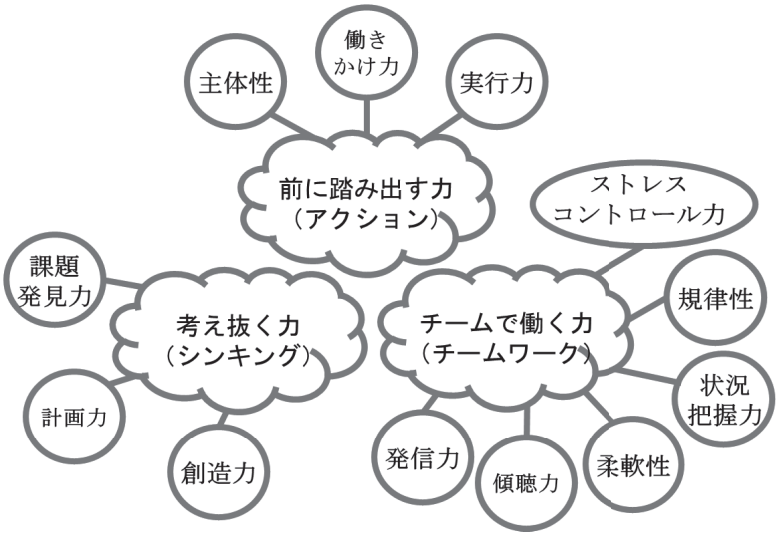

Figure 1　社会人基礎力（3能力12要素）

前提とした心理学研究も複数存在する（e.g. 長谷川他，2017；長内・内間，2022）。このような背景を踏まえると，リカレント教育に対し，心理学が有益な学習内容を提供できるかについて精査する価値があると考えられる。

加えて，ビジネス書，自己啓発本においては『嫌われる勇気―自己啓発の源流「アドラー」の教え―』（岸見・古賀，2013），『80歳の壁』（和田，2022）など心理学と関連の深い書籍が大きな割合を占め，「心理的安全性（psychological safety）」やD.Kahnemanで有名な行動経済学が企業組織で注目を浴びている。これらの書籍は必ずしも科学的に妥当な内容を述べているとは言い切れないものの，社会人の心理学的な知識への関心を反映したものと考えることはできる。

以上のことから，心理学は大学卒業後世代の社会人におけるリカレント教育のための教育内容として有益なものになり得る。未就労者と比較してリカレント教育による継続的な学習は，“自身の興味”よりも“キャリアに生かすこと”への比重が高くなる。それに伴い，学習目標はより具体的な事例・課題解決の背景となる理論の理解を目指し，直面する課題に対してより適切な提案や説明ができるようになることが求められる。その学習の結果として，効率的で豊かな働き方を身につけることが可能である。その点において心理学分野のリカレント教育は社会人にとってニーズが高いと考えられる。しかし，リカレント教育では，自身の興味から新たな発見をするという気づくための学習ではなく，既にもっている気づきを解消するためのスキルを身につけさせる必要があるため，心理学に対する漠然とした興味の充足を目指した“気づき”学習では，リカレント教育としては不適切となり得る。そのためにも実証研究に基づいた社会人の心理学リカレント教育プログラムを考案する必要性がある。社会人が抱く心理学イメージ，学習ニーズ，学習動機・意欲などを正確に捉えることが実用性の高いプログラム構築に求められる。未就労者と社会人の心理学イメージの違いを踏まえ，「社会に必要とされる知識・技能をもった心理学」の普及・発展を目指していくべきである。

最後に，本研究の課題と今後の研究の展望を述べる。まず本研究では，心理学のパブリックイメージに関する内外の文献をできるだけ網羅的に紹介するよう試みたため，個々の研究の詳細について十分に検討することができなかった。そのため，標本抽出法や測定尺度の信頼性・妥当性の程度等を考慮したうえで結果を紹介していないという課題がある。今後は，従来

の研究における方法論的課題を解消したうえで，特に本論文末で論じたような社会人に対する心理学リカレント教育の可能性について実証的に検討する必要があるだろう。

引用文献

Adams, G. (1934). The rise and fall of psychology. *Atlantic Monthly*, ***1***, 82-92.

Banyard, P.& Hulme, J. A.(2015). Giving psychology away: How george miller's vision is being realised by psychological literacy. *Psychology Teaching Review*, ***21***, 93-101.

Brinthaupt, T. M., Hurst, J. R., & Johnson. Q. R.(2016). Psychology degree beliefs and stereotypes: Differences in the perceptions of majors and non-majors. *Psychology Learning & Teaching*, ***15***, 77-93.

Benjamin, L. T.(1986). Why don't they understand us? A history of psychology's public image. *American Psychologist*, ***41***, 941-946.

Dixon, David N., Vrochopoulos, Sam. & Burton, Jennifer.(1997). Public image of counseling psychology: What introductory psychology textbooks say. *The Counseling Psychologist*, ***25***, 674-682.

Fernández-Rodríguez, J. C., Diana Pérez Arechaederra., Martín, A. N., Arturo de Bonis Cañada., Manuel Nevado Rey., & Fernández, G. F. (2020). Current status on the opinion and implantation in society of psychologists in Spain. *Anales de Psicología: Annals of Psychology*, ***36***, 24-29.

半澤 礼之(2009)．大学１年生における学業に対するリアリティショックとその対処―学業を重視して大学に入学した心理学専攻の学生を対象とした面接調査から―　青年心理学研究，***21***，31-51.

Hartman, L, I., Fergus, K, D., & Reid, D, W.(2016). Psychology's Gordian Knot: Problems of Identity and Relevance. *Canadian Psychology: Psychologie canadienne*, ***75***, 149-159.

Hartwig, S. G., & Delin, C.(2003). How unpopular are we? reassessing psychologists' public image with different measures of favourability. *Australian Psychologist*, ***38***, 68-72.

長谷川 有香・吉本 早苗・首藤 祐介・山本 竜也・川島 大輔・小島 康生(2017)．心理学を学ぶ学生に関するイメージ調査(2)―彼らの「社会人基礎力」を社会はどのように見ているのか―　中京大学心理学研究科・心理学部紀要，***17***，87–92.

林 郷子・村上 史朗・三沢 良(2019)．高校生が抱く心理学への期待観―心理学科に在籍する大学生との比較を通して―　奈良大学紀要，***47***，79-92.

Hidalgo, María S., de Nicolás, L. & Yllá, L.(1991). Visión de la imagen de la psicología y del psicólogo en la población de Vizcaya Psiquis: Revista de Psiquiatría. *Psicología y Psicosomática*, ***12***, 30-43.

東 正訓・橋本 尚子・加藤 徹・藤本 忠明(1994)．大学生の心理学観の構造Ⅱ―心理学者との比較―　追手門学院大学文学部紀要，***29***，1-13.

堀江 竜也(2018)．高校生は心理学研究におけるデータ収集方法に関してどのような知識を有しているのか？　日本教育心理学会第60回総会発表論文集，pp.413.

稲垣 知子・中島 誠・本吉 良治・芋良 阪二(1968)．大学における心理学教育の問題　心理学評論，***11***，322-334.

石井 秀宗・村松 仁(2000)．看護学生が抱く心理学の有用観についての検討　心理学研究，***71***，136-143.

岩﨑 智史・大橋 恵・皆川 順(2012)．心理学に対するイメージ（1)―心理専攻学部生と非心理専攻学部生を対象とした横断的研究―　東京未来大学研究紀要，***5***，1-9.

鹿取 廣人(2015)．１部１章　鹿取 廣人・杉本 敏夫・鳥居 修晃(編)(2015)．心理学―第５版―(pp.4-18)　東京大学出版会

神庭 直子・河合 美子・松田 チャップマン 与理子・山口 一・石川 利江(2020)．心理学・社会福祉学への期待と心理職・福祉職のイメージの構造―高校生とその保護者を対象とした検討―　桜美林大学研究紀要：総合人間科学研究，***1***，1-16.

経済産業省経済産業政策局産業人材政策室(2000)．「人生100年時代の社会人基礎力」と「リカレント教育」について．経済産業省，Retrieved 2023年９月18日，from https://www.meti.go.jp/committee/kenkyukai/mirainokyositu/pdf/002_s01_00.pdf

木島 恒一・山下 雅子・野瀬 出(2013)．高校生の心理学知識　北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要，***6***，109-116.

岸見 一郎・古賀 史健(2013). 嫌われる勇気―自己啓発の源流「アドラー」の教え―　ダイヤモンド社

小浜 駿・高田 治樹(2017). 心理学に対して抱かれているイメージと期待(1)―高校生および大学生を対象とした探索的検討―　日本心理学会第81回大会発表論文集, pp.949.

小杉 考司(2017). 心理学をまじめに考える方法―真実を見抜く批判的思考―　社会心理学研究, ***32***, 200.

厚生労働省(2000). 教育訓練給付制度―厚生労働代診指定教育訓練講座―. 厚生労働省, Retrieved 2023年9月18日, from https://www.kyufu.mhlw.go.jp/kensaku/

工藤 与志文・鈴木 健太郎・小林 好和(2004). 大学生の心理学に関する「素朴概念」―本学人文学部生を対象にして―　札幌学院大学人文学紀要, ***76***, 1-16.

楠見 孝(2018). 編者はじめに　日本心理学会(監修)楠見 孝(編)(2018). 心理学って何だろうか？―四千人の調査から見える期待と現実―(pp.5-8)　誠信書房

Lilienfeld, S. O.(2012). Public skepticism of psychology: Why many people perceive the study of human behavior as unscientific. *American Psychologist*, ***67***, 111-129.

前堂 志乃(2005). 大学生のカウンセリングに対するイメージの変化と心理学を学ぶ実感についての研究―自主的体験学習プログラムとの関連を中心に―　沖縄国際大学人間福祉研究, ***3***, 1-35.

松井 三枝(2000). はじめて学ぶ「心理学」に対するイメージの変化―「心の科学」受講前後の調査から―　富山医科薬科大学一般教育, ***23***, 63-68.

Miller,G.A.(1969). Psychology as promoting human welfare. *American Psychologist*, ***24***, 1063-1075.

宮本 邦雄(1994). 女子大学1年次学生の「心理学」講義評価と「心理学」イメージ　東海女子大学紀要, ***14***, 121-129.

文部科学省(2019). マナパス―社会人の大学等での学びを応援するサイト―. 文部科学省, Retrieved 2023年9月18日, from https://manapass.jp/

無藤 隆(2004). 第1部第1章　無藤 隆・森 敏昭・遠藤 由美・玉瀬 耕治(編)(2004). 心理学―第5版―(pp.1-31)　有斐閣

日本学術会議心理学・教育学委員会心理学教育プログラム検討分科会(2008). 学士課程における心理学教育の質的向上とキャリアパス確立に向けて

日本学術会議心理学・教育学委員会心理学の展望分科会(2010). 心理学分野の展望―人間社会の持続的発展にこたえる心の科学の構築―

日本心理学会(2022). 高校生のための心理学講座2023. 公益社団法人日本心理学会, Retrieved 2023年8月23日, from https://psych.or.jp/event/sympo2023_highschool/

沼田 真美・内間 望・藤巻 貴之・今野 裕之(2023a). 高校生による心理学イメージの各側面に関する検討　日本心理学会第87回大会抄録集

沼田 真美・内間 望・藤巻 貴之・今野 裕之(2023b). 高校生による心理学イメージの各側面に関する検討(2)　日本パーソナリティ心理学会第32回大会抄録集

O'Donohue, William. & Willis, Brendan.(2018). Problematic images of science in undergraduate psychology textbooks: How well is science understood and depicted? *Archives of Scientific Psychology*, ***6***, 51-62.

大橋 恵・岩崎 智史・藤後 悦子(2013). 心理学を学ぶことの効果について―心理学の学習がその後の社会人生活でどのように役立ったか―　東京未来大学研究紀要, ***6***, 13-21.

大橋 恵・岩崎 智史・皆川 順(2012). 心理学に対するイメージ(2)―一般市民対象のオンライン調査より―　東京未来大学研究紀要, ***5***, 11-20.

大辻 隆夫・塩川 真理・加藤 征宏・松葉 健太朗(2005). 高校心理学導入に関する一研究―生徒及び教師の意識調査結果からの検討―　京都女子大学発達教育学部紀要, ***1***, 39-50.

長内 優樹・内間 望(2022). 社会人基礎力アセスメント尺度の開発の試み―新卒求職者による経済産業省版社会人基礎力の認識と求人者が求める社会人基礎力との異同を明らかにするために―　日本応用心理学会第88回大会

Pediconi, Maria. & Rossi, Serena.(1998). Formazione in psicologia e immagine della professione. *Ricerche di Psicologia*, ***22***, 83-97.

Ronen, Simcha (1980). The image of I/O psychology: A cross-national perspective by personnel executives. *Professional Psychology*, ***11***, 399-406.

佐藤 誠子(2017). 大学生がもつ心理学の素朴概念とその修正について―授業における能動的学習の観点から―　石巻専修大学研究紀要, ***28***,

107-111.
繁枡 算男(2011). まえがき　日本心理学会(編)(2011). 心理学ワールド―50号刊行記念出版―(pp.1-2)　新曜社
高島 直子・中村 延江(2002). 美容専門学校生の心理学観(Ⅱ)―1998年(五十嵐他, 1999) との比較―　山野研究紀要, ***10***, 59-66.
谷口(藤本)麻起子・金剛 知征(2013). 心理学に対する専攻動機と期待に関する調査研究　聖泉論集, ***21***, 35-47.
丹治 哲雄・木島 恒一・山下 雅子・飯澤 未来(2003). 大学新入生の心理学知識Ⅰ―人間科学部人間科学科新入生の場合―　教育研究所紀要(文教大学付属教育研究), ***12***, 85-92.
丹治 哲雄・木島 恒一・山下 雅子・野瀬 出・岡部 康成・市原 信(2006). 大学新入生の心理学知識Ⅲ―人間科学部新入生と法学部・経済学部新入生との比較―　教育研究所紀要(文教大学付属教育研究所), ***15***, 101-110.
丹治 哲雄・山下 雅子・木島 恒一・飯澤 未来(2005). 大学新入生の心理学知識Ⅱ―人間科学部人間科学科新入生と理工学部新入生との比較―　教育研究所紀要(文教大学付属教育研究所), ***14***, 95-103.
Thumin, F. J. & Zebelman, M.(1967). Psychology versus psychiatry: A study of public image. *American Psychologist*, ***22***, 282-286.
泊 真児(2015). 共通科目「心理学」受講生における心理学の情報源と心理学イメージの関連―自己認識欲求の観点からの検討―　沖縄国際大学地域文化論叢, ***16***, 1-21.
内田 伸子・板倉 昭二(2016). 編者初めに　日本心理学会(監修)内田 伸子・板倉 昭二(2016). 高校生のための心理学講座―こころの不思議を解き明かそう―(pp.5-7)　誠信書房
Van Hoye, Greet., Lievens, Filip., De Soete, Britt., Libbrecht, Nele., Schollaert, Eveline., Baligant, Dimphna.(2014). The image of psychology programs: The value of the instrumental–symbolic framework. ***148***, 457-475.
和田 秀樹(2022). 80歳の壁　幻冬舎
和田 正人(2004). 高等教育におけるマス・メディア接触の影響―心理学・社会心理学・教育工学・情報教育へのイメージおよび興味・知識―　東京学芸大学紀要1部門, ***55***, 345-352.
早稲田大学(2023). 早稲田大学エクステンションセンター　早稲田大学, Retrieved 2023年9月20日, from https://www.wuext.waseda.jp/
Wood, W., Jones, M., & Benjamin, L. T.(1986). Surveying psychology's public image. *American Psychologist*, ***41***, 947-953.
吉本 早苗・長谷川 有香・首藤 祐介・山本 竜也・川島 大輔・小島 康生(2017). 心理学を学ぶ学生に関するイメージ調査(1)―高校生の親を対象としたオンライン調査研究―　中京大学心理学研究科・心理学部紀要, ***17***, 81-85.

なお, 本論文に関して, 開示すべき利益相反関連事項はない。

脚注

1)　https://psychmuseum.jp/about/
2)　https://psych.or.jp/interest/univ/
3)　https://psych.or.jp/interest/faq/
4)　https://psych.or.jp/interest/history/
5)　https://www.youtube.com/channel/UCW54f1grH-gPgBckEJBuy6g　(2023年11月8日時点)

―2023年9.25.受稿, 2023年12.1.受理―

Research Trends and Future Perspectives on Public Image of Psychology

Nozomi Uchima　Mejiro University, Graduate School of Psychology
Nami Numata　Kansai University of International Studies, Faculty of Psychology
Fujimaki Takayuki　Mejiro University, Faculty of Studies on Contemporary Society
Hiroyuki Konno　Mejiro University, Faculty of Studies on Contemporary Society

Mejiro Journal of Psychology, 2024 vol.20

【Abstract】

This paper aims to review research trends on the public image of psychology and propose directions for future research. Since the founding of the American Psychological Association in 1892, the importance of increasing psychological literacy in society has been continuously pointed out. In Japan as well, a major issue for psychology as an academic discipline is the dissemination and enlightenment of psychology, and many studies on the "public image of psychology" have been conducted. These studies, targeting university students, high school students, and working adults, show that they do not always have a correct image of psychology as an academic discipline. Based on these findings, two directions for the dissemination of psychology were described in this study. Finally, we discussed the need for empirical research on the usefulness of psychology as an educational content for recurrent education or reskilling of the post-university generation of working adults, and the need to construct psychological education for working adults based on the results of such empirical research.

keywords : Image of Psychology, Recurrent Education, Psychology Education